配置計画

周辺地域の新たなランドマークと開かれたコモンズ

徳島市内から国道 39 号線吉野川橋を北上する際、四国大学キャンパスがあたかも人々を迎え入れるかのように正対して左手前方に見えて来ます。既存棟群を従えてその前の先頭のように建つのが今回の新学部棟とアリーナとなり、革新されつつある四国大学の顔としてデザインしたいと思います。柔らかな外装で覆われたアリーナ棟と、訪れる人に手を差し伸べるように建つデザイン創生館が、周囲の風景の中で新たなランドマークとなります。

周辺地域の人々と大学の新たな接点となるのが、マルシェなどのイベントが開催可能なピロティ、野外劇場風の大階段や棟間の「創生広場」、そこにつながる学生コモンズ・喫茶などです。さらに現体育館を改修して残すことができれば、アリーナ利用にゆとりが生まれて市民イベントや地域開放の機会も生まれます。

豊かな風景を享受する

徳島を象徴する「眉山」「吉野川」の雄大なランドスケープ存分に感じられる施設としたいと思います。斜に開いた新学部棟の廊下空間からは、常にそれらの景色を伺うことができるようにします。また、アリーナのステージを南側配置とし、ステージの奥に見える眉山が見えような演出としても使うことが可能です。

ランドスケープと一体的な建築

既存のキャンパスは豊かなランドスケープが点在して配置されています。新設するの周囲はランドスケープに囲われた配置とすることで、外部空間にも様々な居場所つくります。

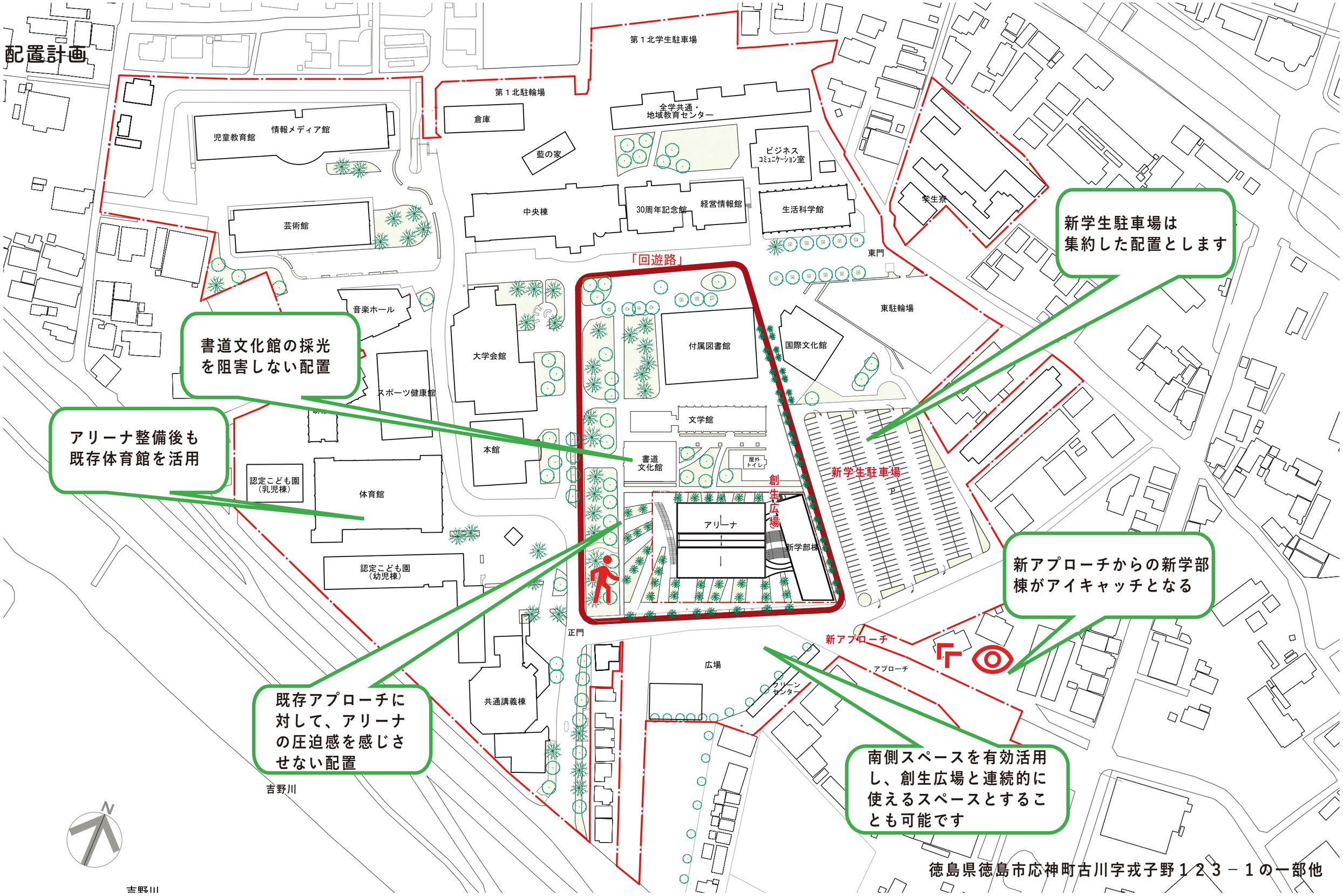
ボリュームイメージ

書道文化館屋上からの風景

前面道路からの風景

キャンパス内の豊かなランドスケープ

配置計画

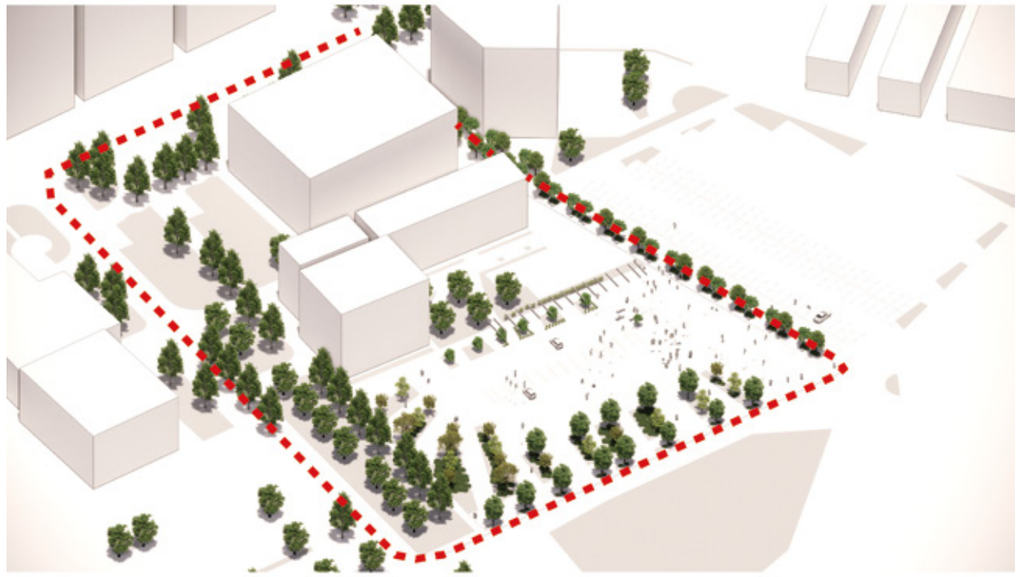


徳島県徳島市応神町古川字戎子野１２３－１の一部他

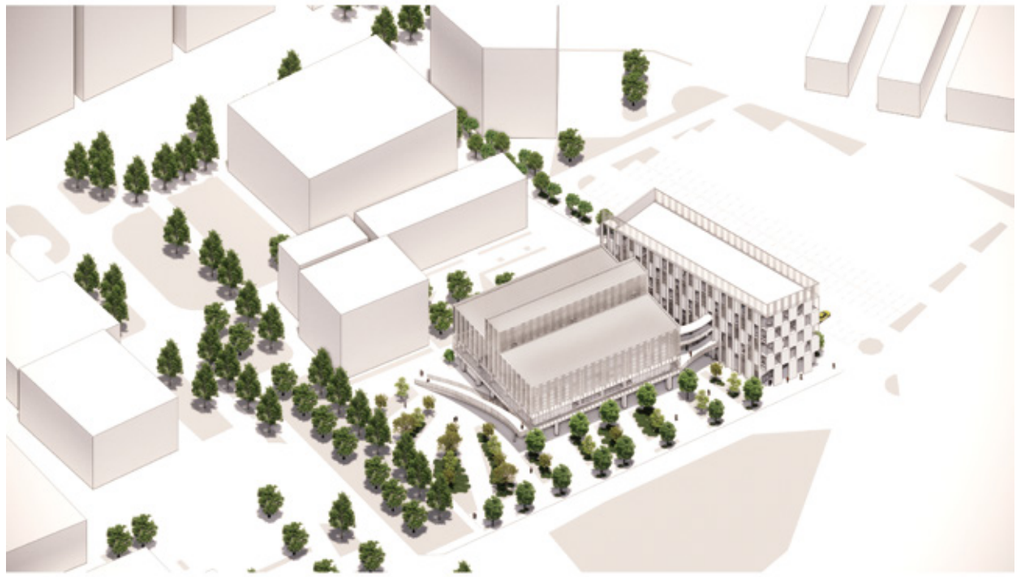
基本設計書抜粋

配置　ダイヤグラム

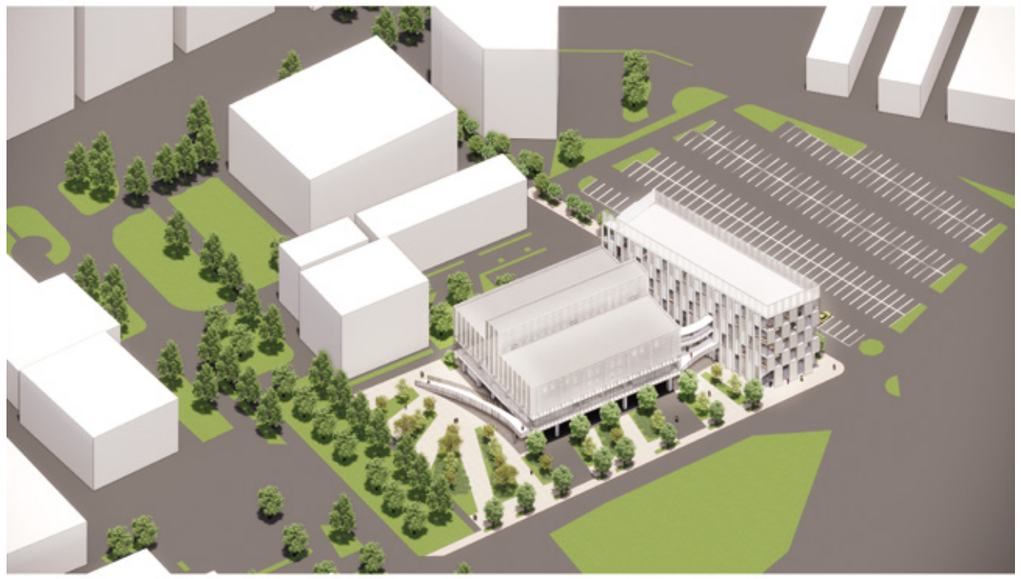
01　3800m2 を敷地とする



02　新アプローチと正門、東門を含めて回遊路を整備する

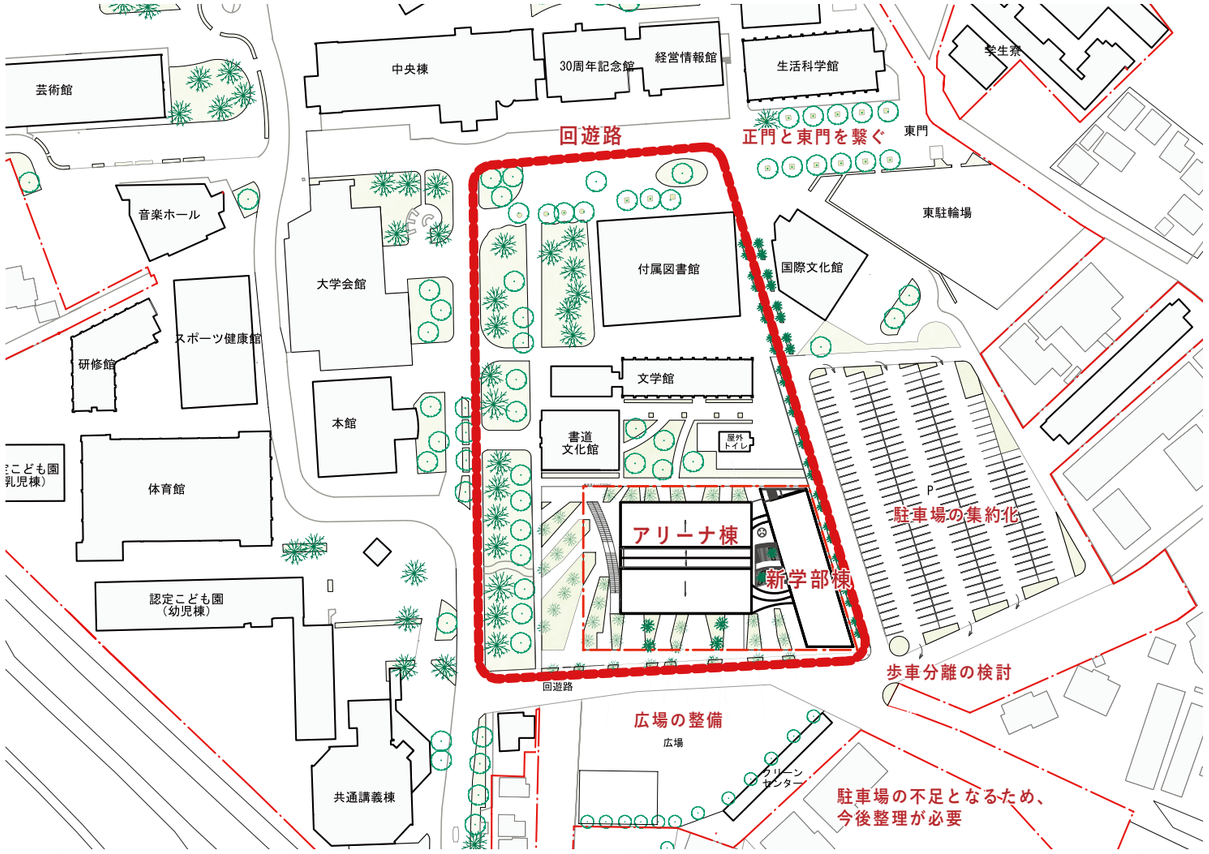


03　新学部棟とアリーナを配置する



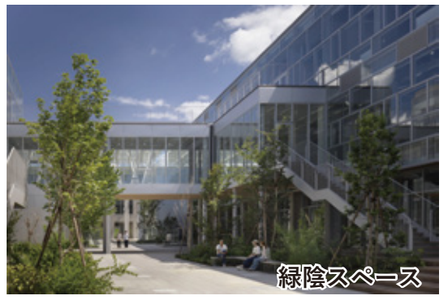
04　豊かなランドスケープの中にある施設

キャンパス計画



屋根

ベンチ / テーブル


緑陰スペース

パーゴラ

噴水

擁壁ベンチ

▲ 上記は参考イメージです

キャンパスの回遊ネットワークと、ランドスケープの整備

キャンパスへの現在までの主要なアプローチは、吉野川堤側から中央館に向かうアメリカフウやクスノキの立ち並ぶプロムナードですが、今後東側からの第二のアプローチが生まれることで、キャンパス内を回遊するネットワークの形成が望まれます。そこで東側からの新しい軸路を受け止める敷地南東の交差点を起点として、プロムナードに向かう東西軸と、30 周年記念館方面に向かう南北軸を整備し、キャンパス中央部をロの字に結ぶ回遊路を完結させます。現在 2 面に分かれている学生用駐車場は 1 面に統合するともに、東西軸南側にも増設して利便性を高めます。次の段階として、可能であればシャトルバス車庫を解体、水路の暗渠化やクリーンセンターの移転などを検討して、南側の跡地に軽運動などにも適する芝生広場をつくります。

新旧の建築が相乗的に働き、未来を創り出すキャンパス整備指針

今回の新棟には東西両側に二つの正面が生まれます。西側は緩やかにカーブする大階段が人々を迎え、アリーナの大開口からはキャンパスの緑が取り込めます。一方、東側では開放的な新学部棟とダイナミックな「創生広場」が大学革新の象徴となります。新棟のシルエットは隣の書道文化館からの吉野川の眺望を損なわないよう配慮しました。

このキャンパスを拝見し、長い将来を見据えたキャンパス整備指針が必要と感じました。建物の配置ばかりでなく、動線やインフラ経路の合理化と機能更新性が重要と考えます。回遊路に沿ったインフラのルートを順次整備し、既存棟をバックアップするほか、今後の新施設にも接続する大動脈を形成します。併せてキャンパス全体の緑を有機的につなぐ、総合的なランドスケープ・デザインを提案したいと思います。

実施設計時イメージパース

正門側からのぞむ

南側からのぞむ

新アクセス路からのぞむ

東側から新学部棟をのぞむ